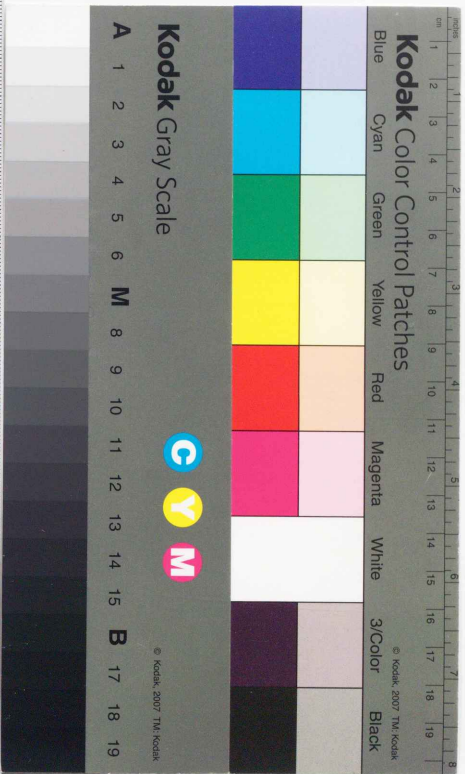




Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM, Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

各務野の伝説



各務野の伝説

各務野の伝説

### はじめに

本書は、昭和五十二年各務原市民ニュースの創刊に当たって、当時の中日新聞各務原支局の鈴木記者から、各務原市広報課に勤務していた私に、連載で何か書いてほしいと要請がありました。しかし文筆の経験のない私には到底無理であるので、再三固く辞退いたしました。が、たつての要請にそれ■では、私の知る限り、又先輩諸氏のお話なども参考に、「各務野の伝説」を書いて見ようと言うことになり、毎月一回の発刊に併せて、昭和五十二年五月から昭和五十四年八月まで連載したものを、そのまゝここに纏めたものです。

浅学の私が書いたものですから、言葉遣いや記憶の違いがあるなど、又伝説には諸説があつて多少違いがあると思いますが、ご一読のうえ、ご叱声賜われれば幸甚でございます。

平成四年 三月

小川 登

## 目 次

|               |    |
|---------------|----|
| 各務野の由来        | 1  |
| 中仙道とねずみ小僧次郎吉  | 2  |
| 姥が懐           | 5  |
| 弁慶岩           | 6  |
| 山田寺と宮塚        | 8  |
| 信長の弓懸板        | 10 |
| 東門奴           | 11 |
| 浜見塚と恋物語り      | 13 |
| 壬申の乱と村国男依の墳墓  | 15 |
| オシヤゴジの由来      | 16 |
| ハカゴ山（不動が丘）の由来 | 18 |
| 弓張りの池と夕暮富士    | 20 |
| 雷と八幡様の井戸      | 21 |
| 加佐美神社と獅子頭     | 23 |
| 承久の愛と不動山      | 25 |
| 手力様と木彫の龍      | 26 |
| 狐と少林寺の稲荷堂     | 28 |
| 権現様と雨こい       | 30 |
| 西入坊と蓮如の杖      | 32 |
| 弁慶と馬の足跡       | 33 |
| おかせ池と大蛇       | 34 |
| 悲恋のちようちん      | 36 |
| 亭が瀬の由来        | 38 |
| 甚兵衛と古狸        | 40 |
| 各務野の夜明け       | 43 |

## 各務野（かかみの）の由来

各務原台地と言われる一帯は、むかしから、各務野とよばれて、このあたりは、田畑もなく、青草の繁るだけの宏大な原野で、平坦で鏡のようなどころから、いっしょに誰いことなく鏡野といっていたのが、いつの頃からか各務野に転じたとも言ひ伝えられています。

また一説には、次のような物語りが伝えられています。

むかし、暑い夏の夜に、今の新加納あたりの茶店ででも酒を飲んで来たものだろうが、一人の旅人が千鳥足でこのあたりまで来たところ酒の酔いがまわって、着ていた着物を脱ぎ捨てて裸のまま気持ちよさそうに、正体もなく眠っていました。

ところが夏の夜のことですから、蚊にとつては思いがけない獲物とばかりに、われ先にと旅人に群がり始め、しばらくのうちに、身体じゅう一ぱいに蚊がとま

り、まるで糞虫のようになってしまいました。

折から、ここを通りかかった一人の武士が、この姿を見て「これは、いったい蚊か糞か」と言いつつ、さわってみたら人であつたので驚いたという話が、次々に人々に伝わって、蚊か糞か<sup>が</sup>、いつしか「各務野」になり、このあたり一帯の地名になったと伝えられています。

### 中仙道とねずみ小僧次郎吉

中仙道は、その昔東海道などとともに、東西の往来に重要な役割を果たしてきた道で、各務原台地のほゞ中央（今の国道二十一号あたり）を東西に走っていました。

江戸時代の各務野は、東の鶴沼宿から西へ三里（約十二キロメートル）ばかりの間は、見渡す限りの草野原で、人家の少ないさびしいところであつたようです。この野原の中仙道ぞいに「いろは屋」という一軒の茶屋がありましたが、旅人

にとっては、ひと休みしたり、また泊まることもできて、重宝（ちようほう）がられていたようです。

ある秋の夕闇が迫る頃ここにさしかかった老母と娘は、やっと見えた灯火をたよりに、この茶屋にたどりつき一夜の宿を求めました。

前後して通りかかった六十六部（ろくぶ）姿の、ねずみ小僧次郎吉も「いろは屋」に、わらしを脱ぎ宿をとったのです。

夜はしんと更けて、ふと目をさました次郎吉の耳に、女の絹を裂くような悲鳴が入ってきました。これは、ただごとではないと跳び起き声のする部屋にきて見ると、老母と娘が宿の夫婦に金銭を取られかけているところでした。



（ねずみ小僧次郎吉の墓）

これを見て義賊といわれた次郎吉のことですから、だまって見過ごすわけには  
いきません。宿の夫婦を取り押さえてよく事情を聴いて見ると、今までも弱そう  
な旅人とみると、夜中に金銭をまきあげ、言う事を聞かない時は、無残にも殺し  
てしまい、裏庭の古井戸に死体を投げ込むという、鬼のような夫婦だったのです。  
義憤に燃える次郎吉は、この夫婦を成敗し、老母と娘を助けていづこともなく  
立ち去ったと伝えられています。

後世までこの話が伝わって、後の人が建てた記念碑が次郎吉の墓として、旧岐  
阜大学跡地裏の森の中に、今は訪れる人もないまゝにひっそりとなっています。

### 姥が懐

那加地内の北部、北洞から桐野へ通ずる  
山道のほゞ中央の小さな峠（今の尾崎団地）  
があり、その東側に何かほのぼのとした温  
かみのある地名で、姥が懐（うばがふとこ  
ろ）とよばれるところがあります。

慶長五年、当時岐阜城主であった織田秀  
信が、関ヶ原の戦いに豊臣方に加わり、徳  
川方の軍勢を迎え撃ったが猛攻に支え切れず遂に落城しました。このとき、ある  
武士の乳母がその乳子をつれて、激しい戦火のなかをくぐり抜け、ここにたどり  
つき、この地に隠れて乳子を養ったと伝えられています。

昔から、ここから流れる清水を飲むと乳がよく出ると言われ、遠方からも訪れ



（姥が懐）

て、清水を汲んで持ち帰る人が多かったと言う。

また、この土地の砂を妊婦の床下に入れて置くと、安産ができるとも伝えられていました。

時代の波とともに、このあたりも開発されて、近年住宅団地となり、保存されておるとは言うものの、今は昔をしのぶようですが、岐阜城の落城にまつわる哀れな物語として、後世の人々に語り継がれています。

### 弁慶岩

蘇原地内の東島池のとなり―赤星山（市中央公民館のあるところ）の南に、小さな松林の小高い丘があります。

今では周囲が開発されて工場が立ち並び、昔の面影はありませんが、当時は、このあたり一帯は大きな松が老い繁り、そのなかに高さ約三・七メートル、巾が二・七



（弁慶岩）

メートルほどの大岩があり、ほぼ中央から二つに切り裂かれたようになっておりました。

その昔、源義経の家来で歌舞伎などでも有名な武蔵（むさし）坊弁慶が、たまに、このあたりを通りかかったとき、力試しに持っていた薙刀（なぎなた）をふりかぶり、この大岩を切り裂いたものだ、言い伝えられています。

また、蘇原吉新町の西のはずれには、弓張りの池と言われる池があって、こゝで弁慶がこの時につかった薙刀を研（と）いだ、とも伝えられています。このあたりも住宅地となって往時を忍ぶものもなく、こうした伝説さえも今は忘れ去られようとしております。

## 山田寺と宮塚

蘇原大島町の北、見渡す限りの稲田の中にポツツリと小高い丘があり、宮塚と呼ばれています。

ここは、その昔（約一三〇〇年前）この地方の県主（あがたぬし）として、約十年間このあたりを治めていた蘇我倉山田石川麻呂の墳墓だと言われています。

任期がきて大和（奈良）に帰り、大化の改新にてがらをたて、その後、右大臣にまなつた人ですが、なくなつたあと、村の人々がその死を惜しんで遺骨をもらい受け、



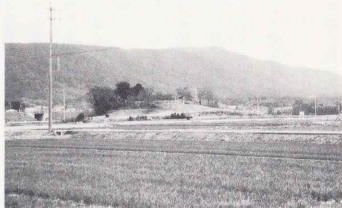
（山田寺）

石川麻呂の屋敷跡に葬つたのが、この宮塚だということです。

また蘇我倉山田石川麻呂は、今の蘇原寺島町のあたりに、大化五年に山田寺を創建したとも伝えられています。

今は、礎石が残っているだけで配置や規模は判りませんが、当時は、東山道ぞいの程遠くない、この地に立派な伽藍（がらん）が立ち並び朝な夕なに陽に映えて、奈良時代には最も栄えていたようです。臉（まぶた）をとじると、衣を身にまとうた坊さんの行き交う姿が浮かんでくるようです。

これを裏付けするように寺島とか坊之屋敷とか、寺院にちなんだ地名によって昔をしのぶことがで



（蘇我倉山田石川麻呂の墓）

きますが、土地改良などにより新しい町名が付けられ、由緒（ゆいしよ）ある地名がきえて、ここにも時代の新しい波が、ひたひたと押し寄せてくるようです。

### 信長の弓懸桜

那加長塚町地内の手力雄神社は、毎年四月十日が例祭で、大へんにぎわいますが、この境内に、信長の弓懸（かけ）桜と呼ばれる桜の古木があります。

その昔、織田信長が稲葉山（今の金華山）の城主斉藤竜興（たつおき）を攻略したときこの付近のお寺を焼いたと、いわれています。手力雄神社も一学に焼き払おうとして、雑兵に神社をとり囲ませ、火を放たせましたが、俄（にわ）かに霧がたちこめ、目がくらみ、手足の自由がきかなくなってしまったと伝えられています。

そこで、さしもの信長も、神様の威力の偉大さに驚き深く詫びたところ、不思議（ふしぎ）にも霧は晴れ、軍勢は、もとのように元気になったということです。

その後信長は、手力雄神社をあつく敬うようになり、斉藤竜興を滅したとき、このお宮に参拝し、境内に的場をつくって、弓術をしました。

このとき、たまたまこの境内に生えていた桜の一枝（えだ）に、弓をかけたのがこの弓懸桜であるといひ、いまは、初代の桜が枯れて二代目であるとも言われています。

また、この桜の近くに的場桜もあり、春になると当時を偲（しの）ぶように、きれいな花を咲かせています。

### 東門奴

その昔、蘇原の坂井町から東門町に至る田んぼの中の畠（なわて）道（各務原高等学校の西の県道江南・関線のあたり）に、夜も更けて人通りの少なくなった頃。

青白い灯を、ともして東門奴（やっこ）が出ると言われています。

むかし、或る殿様に仕えていた身分の低い奴（やっこ）が、あるとき殿様から預かった金子（きんす）を、後生大事にもってこのあたりを通りかかったとき、どうしたはずみか大切なお金を紛失してしまいました。

そのために奴は、殿様の怒りにふれて無残にも手討ちになり、殺されてしまいました。死んでも死にきれない奴の亡霊が、夜になると職道を南から北へ、北から南へと、青い灯をともして紛失した金子を探してあるいていると、伝えられています。その正体を見た人は、ないようです。

このあたりでもこの頃では、各務原高等学校や、住宅が建ち、舗装された江南・関線を夜おそくまで、自動車が行き交（か）い、東門奴も、出るに出られなくなつたのか、こういう言い伝えを知る人も少なくなつたようです。

## 浜見塚と恋物語り

新加納に浜見塚という地名があります。

その昔、濃尾平野がまだ海であった頃、浜の見えるところから浜見塚と名づけられたものと思われませんがこのあたりの俗謡に、

燈明目あてに

来たものを

なぜ今宵（こよい）は

消えている

当時、西は不破の赤坂から東は犬山のあたりまでの海上に七里の渡しがあったと、伝えられています。これにまつわる悲しい恋の伝説があります。

いまでも昔も恋の道には変わりがないようです。

その頃、赤坂の男と犬山の女の間に、恋が芽生えていつしか深い仲になり、あ

る時は男から、ある時は女から互いに通って嬉しい契（ちぎ）りを交わしていった。

ある夜、女の方からいつものように舟を出して漕いで行くうちに、合図の目じるしの燈明が、消えてしまいました。二人の窓に水をさそうと不粋（ぶすい）な男が、わざと灯を消してしまったのです。

そうとは知らぬ女は、てっきり男の心が変わったものと思いこみ、早合点して水中に身を投げて、死んでしまったと言うことですが、当時の女性の心を語る、かわいそうな悲恋の伝説です。

### 壬申の乱と村国男依の墳墓

天智天皇が亡くなられた朝廷では、六七二年頃、皇位継承をめぐって、天皇の弟である大海人（おおあま）皇子（のちの天武天皇）が皇子である大友皇子（弘文天皇）と争って勝ち、即位された折の戦いを壬申の乱といっております。



（村国男依の墓）

この戦いの折、各務郡（かかみこうり）村国郷の豪族であった村国男依（おより）は、美濃国の兵を集め大海人皇子の味方となって近江（おおみ）朝廷まで攻め入って勝利をもたらし、この戦いで大きな役割を果たしたと、つたえられています。

その後、村国男依は外小紫位（げしょうい）（従三位に相当する）を贈られ、

天武天皇の朝廷に仕えていたといわれますが、この地方は、代々その子孫が治めていたようです。

各務の村国神社の御旅所は、幹のまわり約三メートルにも及ぶ大木が斉垣の中に、そびえています。が、このあたりでは、ここが村国男依の墳墓の地であると言いつたえられています。

### オシャゴジの由来

天下統一の志のなかばで倒れた織田信長の後を継いだ豊臣秀吉は、この大事業を進めるなかで、土地と農民を結びつけて、農地をもととする支配体制を安定させるために、刀狩りと検地を行っています。

これまでの有力な農民のなかには、多数の下人をかかえて耕作に従事させ、戦時には刀や槍などを持たせて戦いに従っていました。が、秀吉は、農民からすべての武器を取りあげ農民の身分を確立するとともに、村毎に検地帳をつくり、農民

と土地を切り離さないようにしました。

オシャゴジというのは、この時の検地に使用した縄を埋めたところであると言われていますが、また一説には検地を始めるにあたって基地にしたところであるとも言われています。

このオシャゴジを漢字で表現する場合、ところによって違いますが、市内では、那加あたりでは社宮神、社護地であり、稲羽では西宮神、各務では御社宮地、蘇原では社護司であつたりして、まちまちですが神社の場合もあれば、竹藪のときもあり、また立石であつたりする場合もあり、それが、それぞれ別々の伝説をもっていることもあるようです。

那加地内には、検地の折に使ったと言われる槌が、ご神体となっている祠（ほこら）や縄を埋めたと伝えられる康申（こうしん）様と呼ばれる小さな塚などがあり、稲羽には西宮神社があります。

また蘇原大島町には、稲荷神社の境内に社護司神社がありますが、古老の話に

よれば、現在土地改良で、川の姿をかえた大島地内の境川のあたりあったものを、明治年間に稲荷神社の境内に移したものだそうです。祭神は、蛭子命（ひるこのみこと）と言われています。

### ハカゴ山（不動が丘）の由来

市役所の北方に、那加地内から蘇原吉新町を縦断して東へ抜けていた道路で、巡検街道（今の十六メートル道路）という街道がありました。

この街道添いに小高い丘があり、これを今は不動が丘と呼んでいます、その昔、土地の人はこの山を「ハゴカ山」と呼んでいました。

いまと違って、この街道の両側は、うっそうと昼なお暗いような松林が老い繁っており、この山を根城に



（ハカゴ山（不動が丘））

して、追いつき（強盗）が立つこもり、こゝを通行する旅人を見張り、通行人を物色して「ハカゴ、オコカ」衣服をはぎ取るうか、やめようかと、裕福そうな旅人だけを区別して襲ったと言われています。

そのために近隣の村人たちは、この山を「ハカゴ山」と言うようになったと伝えられています、いまは松林もまったくなくなり、道路も十六メートルと巾広く拡張され、昼夜をとわず自動車、ひっきりなしに走って、当時をしのぶよすがは、何もありません。

またこの山の「ハカゴ山」という名まえさえも忘れ去られようとしています。

## 弓張りの池と夕暮富士

一世の風雲児である織田信長が、美濃の国を征して稲葉山（今の金華山）に居城を構え天下に号令する機会を虎視眈々（こしたたんたん）として狙っていたころ。

ある日、各務野に狩りに来た折り、蘇原地内の安原（今の蘇原花園町のあたり）で、弓を引いたと伝えられるところから、このあたりを弓張り坂と呼ばれ、またここにあった小池を、弓張りの池と言ったそうですが、今は、その面影を全くとどめず、「弓張りの古跡」と書かれた碑が後に建てられました。これが残っているだけです。

また、日が暮れかかって帰路についた信長が、折



（夕張りの池古跡から夕暮富士を望む）

りからの夕陽（ゆうひ）が北山に映（は）えて没しようとするのを見て、「あー絶景かな、山は、まさに富士なり」と。

弓張り坂から見た北山はその姿が優雅で、まさに富士山によく似たところから、誰いうことなく夕暮富士と呼ばれるようになり、ここがこの山を見るに、絶好の場所だということです。

## 雷と八幡様の井戸

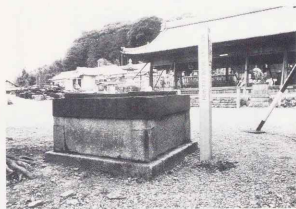
昔から地震、雷、火事、親父と恐れられていますが、今年もまた、雷のシーズンが近づいてきました。

蘇原の古市場町地内にある加佐美神社は、その昔から八幡様といわれ、この地方の人々の崇拜（すうはい）を集めており、一昨年には金幣社に昇格された由緒（ゆいしよ）のあるお宮様ですが、ここの一隅にひなびた屋形のお古井戸があります。

昔は今より雷雨が大へん多かったようですが、その昔、ある夏の日のこと、このあたり一帯に大雷雨があり、風は大木を揺がし、雨は滝つ瀬と降りしきり、稲妻が目がくらんで外も歩けないような、すさまじさのなか、どうしたことか、この古井戸に雷が落ちたそうです。

これをご覧になった加佐美神社の神様は、大へんお怒りになり、神を恐れずお宮の井戸に落ちるとは不届（ふとど）きなやつだ二度と雷が出られないようにと、この井戸に蓋（ふた）をしてしまわれたということです。

蓋をされて出るに出来ない雷は、大へんに困り神様に、この社（やしる）の境内はもちろん、蘇原の地方には二度と落ちませんから、井



（加佐美神社の雷が落ちたと伝えられる井戸）

戸から出してくださいと頼みましたところ、神様もあまり頼むので、かわいそうに思われ、二度と蘇原へ落ちるなど、さとして出されたということです。

それ以来、この地方には、雷の落ちるのが、めっきり少なくなったそうですが、八幡様のご威光の一端を物語る伝説として、この地方に語りつがれております。

### 加佐美神社と獅子頭

加佐美神社については、前月号で雷様と井戸について書きましたが、ここに伝わる獅子頭についてのお話をもう一つ――

市の重要文化財に指定されている獅子頭は、高さ五十センチメートル、横四十七センチメートル、奥行四十五センチメートルの木彫りのもので何も変哲（へんてつ）ありませんが奉納箱には、延宝三年（一六七五）三月寄進と書かれていますから、元禄年間より少し前、江戸時代の前期で今から約三百年の、ようやく

太平の時代になった頃で、作者は詳（つまび）らかではありません。

その昔、中山道（今の国道二十一号）添いの松並木のなかに、一際（ひとときわ）大きな松があり、その頂上のあたりから妙（たえ）なる香りが、ただようので村人が登ってみたところ、この獅子頭が枝に掛かっていたということです。

そこで村人が集まって松の木から、おろそうとしましたが、どうしたにか松の枝から離れません。

当時野口村に住んでいた安積某が、これを聞いて懇（ねんご）ろにお祈りをし、やっとのことでこの獅子頭を松の木からおろしたと伝えられています。

いつの頃からか、判りませんが、例年十月十五日の加佐美神社の例祭には、御旅所（おたびしょ）から、お宮様までの渡御（とぎよ）に従って安積某の子孫の一統が、沐浴斎戒（もくよくさいかい）してこの獅子頭をかぶり行列をしていたということですが、いまもなお、この行事は引き継がれて、袴（かみしも）に身をととのえた人たちによってしずしずと、古式豊かに行われており、八幡様のお

祭りの呼びものとなっています。

### 承久の変と不動山

濃尾平野の北端、ようやく平野が終わろうとする木曽川べりに小高い山があり、土地の人々は、前渡の不動山と呼んでいます。

源頼朝が始めた鎌倉幕府が三代で終わったとき、京都と鎌倉との間に起こった承久の変（今から約七百五十七年前）で、木曽川をはさんで戦った古戦場跡ということです。

ここは、急流で浅瀬の少なかつた木曽川の数少ない渡しの一つで、摩免戸（まめど）の渡しといわれ、承久三年六月東軍と西軍が、衝突してしのぎをけずり、お互いに奮戦しましたが戦いは西軍に利あらず、各所で敗戦をかさね遂には京都まで追いつめられますが、退去する西軍のなかにあつて最後まで踏み止まって戦った鏡右衛門尉久綱は、川岸に自分の姓名を記した旗をたてて、ここを前途と

戦ったということですが、衆寡敵せず遂には、自刃して果てたと伝えられています。

後世になって土地の人があわれみ、この時の戦いで死んだ勇者の霊を弔うため五輪塔が建てられましたが、さらに、前渡不動山の中腹に集められて、ひっそりとした、たたずまいのなかに苔むした姿で当時を忍ばせています。

### 手力様と木彫りの龍

那加長塚地内の手力雄神社は、その昔織田信長の信仰が厚く、これにまつわる伝説は数多くありますが、ある夜明け前、もやのたちこめた、この神社の境内にある古井戸で何かが水を飲む音がしました。不審に思った近くの若者が、家を出て恐る恐る音のする古井戸の方を見ると、龍が井戸のなかから頭を出していたので後も見ずに逃げ帰ってしまいました。

ところが、その頃この近くの村里の田や畑には、何者とも知れない大きな足跡

がついてそのたび毎に作物は大きな被害をうけていました。

ある日のこと、村人たちが拜殿にある木彫りの龍を見たところ、心もちしめったように見えるではありませんか、これは確かに、この龍が田畑を荒らし廻って、夜明けになると井戸の水を飲んでいたに違いないと言ったことになったそうです。

しかし、神様のお使いかも知れない龍のことですから動かないようにする妙案があらう筈（はず）ありません。神主と相談のうえ、二度と動けないように目玉に大きな釘を打ってしまったところ、その後は、龍の足跡を見た人も水を飲みにきたところを見た人もなくなって、村は平和になり、田畑は荒らされないようになったと言うことですが、この伝説も一部の古老の間に知られておるだけで、次第に忘れ去られようとしております。

## 狐と少林寺の稲荷堂

那加新加納町に少林寺と言うお寺がありますが、この寺は、昔この地方を治めていた旗本の坪内氏の菩提寺（ほだいじ）ですが、坪内氏は、戦国時代には織田信長に属していましたが、のち安土桃山時代の天正十八年（一五九〇年）今から約三八八年前、徳川家康に仕え、慶長五年（一六〇〇年）の関が原の戦に功をたて、六五三三石を与えられた旗本です。代々この寺に葬られたといわれていますが、ここにある稲荷堂にまつわるお話し――

稲荷堂は、この八世住職鼎州和尚の時に建立されたと伝えられています。それ以後一七〇年を経た今も太い丸柱や美しい彫刻などが当時の面影を伝えています。本尊の稲荷大明神は、文化元年（一八〇四年）安置されたと言い、この稲荷堂は市の重要文化財に指定されています。

昔鼎州和尚は、本堂の裏のお墓に来る狐を大へんかわいがり大好物の油あげを

与えたりかしを与えているうちに、狐の数もどんどん増えていったそうです。

あるとき和尚さんが、飛鳥観音から帰る途中、ハゴカ山のあたりで白髭（ひげ）の行者が、稲荷様も大ぶん荒れたので明朝、湧川と言う者が稲荷堂を寄進するので、その男に新しく建てさせるのだと言ってその姿が消えてしまいました。

不思議な事もあるものだと思っていたら翌朝まだ暗いうちに一人の男が現れ湧川という者ですが、昨夜、夢に狐が現れ、少林寺の稲荷堂を建て直せ、和尚にも告げておいたから、夜が明けたらすぐに行け、そうすればお前は立派な大工となって世に出ると言われたので私にやらせてくださいとたのみました。

そこで和尚さんは、ますます不思議に思ったが、昨日のこともあるので、その男に建築をまかせましたが、この時にできた稲荷堂が、現在のものだと言うことです。

### 権現さまと雨こい

広い濃尾平野の終わるあたり、市内の最北端にひととき高い山があり、持田の権現山と言ひ、山頂にひなびた社（やしる）があります。

このあたりでは、靈験があらたなことで地元のスう拜があり、昔（戦時中も）は、日照りが続くとき村人たちが手に手に松明（たいまつ）をかざして、この権現様に雨こいをしたそうです。

その昔、ある年もやっぱり長い間雨が降らず、田の土を握っても砂のようになく、稲の葉の色が変わるほどになってしまいました。

そこで村では昼も夜もなく雨こいのお祈りを始めましたが、なかなか雨はふりません。

山から出てくる少しばかりの水で米を作っているところは雨がたよりですが、こんなときは、ひとたまりもありません。

庄屋は、一人の若者をおともにつれて、日の暮れた山道を権現山に登り、社の近くの大きな岩のあたりで、「わたしのからだは、神様に捧げますからどうぞ雨を降らせてください。」と一生懸命いのりました。すると、大岩のかけから、白髪の老人が「それほど雨がほしいなら降らせてやろう」と言ってどこかへ消えてしまいました。

これは、神様のお告げに違いないと喜んでいたところ俄（にわか）に大雷雨が降りだし目も開けぬような稲妻が走りまわりました。

おともの若者が一瞬目をつぶった間に、庄屋の姿はなくなって、大岩がいつのまにか大きく二つに割れていたそうです。

今もその大岩は頂上の近くにあつて、村々を見おろし伝説をつたえています。

## 西入坊の蓮如の杖

愛知県との県境を流れる木曽川のほとり―下中屋町の蓮如様で有名な西入坊という、お寺があります。

毎年四月二十五日は「蓮如祭り」として、昔から近在の善男善女が集まり、屋台の店も抬げられて大にぎわいを見させていますが、この境内に、樹高約三十メートル、根もとの周囲は約四メートルの大銀杏（おういちょう）があります。

樹勢は益々盛んで、昭和三十四年の伊勢湾台風の時に市内の各地にあった巨木が、ほとんど倒れ、現在では大へん貴重な大木といわれています。

その昔、蓮如上人が各地に佛の教えを説いて歩きましたが、中山道を三回も往復されたと伝えられています。西入坊の先祖である行念というお坊さんは、とくに親切に教えを受けたそうです。この時、自分で自分をかいた肖像画とともに、庭に一本の杖をさして行かれたそうです。それが、いつしか根づいてだんだん大

きくなり、この大銀杏の木は、「蓮如の杖」と呼ばれて、今では、市の天然記念物として大切に保護をされています。

## 弁慶と馬の足跡

各務原市の最北端に連なる山並（やまな）みの主峰、持田の権現山のふもと、岐阜カンツリークラブのゴルフ場の入口のあたりに谷川があり、ここに武蔵坊弁慶の強さを伝える物語があります。

今はゴルフ場になって昔を忍ぶものもありますが、権現山の登り口の谷川の中に大きな岩があつて、この岩に馬のひずめに似たくぼみが残っておりました。

その昔―源義経の家来で有名な武蔵坊弁慶が、威風堂々（いふうどうどう）と、このあたりを馬に乗って通りかかった時、この谷川を渡ろうとして、くだんの大岩に馬が足をかけました。

ところが、どうしたことが馬の足が大岩に埋まりこんで抜けません。

弁慶は、やむ得ず馬から降り満身の力を振りしほって、大岩から馬の足を引き抜いて通って行ったと言うことですが、そのあとに馬の足跡が残ったと伝えられています。

今は、あとかたもなくなってこの伝説さえ知る人は少ないようです。

### おがせ池と大蛇

昔から、いろいろな伝説のある各務のおがせ池に、土地の古老によると次のような言い伝えが残っています。

昔この池には大蛇が住んでいて、畑をあらしたり、家畜を食い殺していたそうです。ある年



(おがせ池)

のこと大変な日照りが続いて、池の水も枯れてしまい、村人がたいまつをもって山へ登ったり、池のまわりで雨こいをして、どうしても雨が降りません。

そこで庄屋は、大切な馬十頭を池のまん中に連れ出して「蛇神さま、これを受けとってかわりに雨を降らしてください。」と祈りました。するとどうしたことか、大雨が降りだし池の水は見るまに増えて、あつと言うまに庄屋もろとも馬も牛も池に沈んでしまい、まる三日間降り続いたあと、うそのように晴れあがりました。

三年の歳月が過ぎた今日、庄屋のことを忘れない村人たちは、大勢集まってお経をあげて三回忌(き)をつとめていました。そのとき池の中から誰か泳いできます。よく見ると庄屋さまです。

庄屋の話によると、池の中に引き込まれると大蛇がいて腹をさすってくれと言うので、何度もさすってやると大きな口から太刀(たち)をはき出しました。そうして「私は、この池の主だがいろいろ悪い事もやってきたが、なかなか往生で

きない、私の宝であるこの太刀をさしあげるから、坊さんになって、みちびいてくれ私が往生できればこの太刀は、必ず村を守ってくれるだろう。」と言いました。

この太刀は、今も池の近くの祠（ほくら）に祭られ、村の守り神として近隣からの参拝が多いということです。

### 悲恋のちようちん

岐阜・愛知両県の境をなして流れる木曽の流れに添った、前渡の里に伝わる哀れな伝説。

その昔、この村に竹宗という、ひとりの武士が住んでいたという。この武士はひとり者の上に顔だちが、ととのって男らしいので村里の娘たちは、誰もがお嫁さんにもらって欲しいと思っていました。

しかし竹宗には、八重という生まれる前からの許嫁（いいなづけ）がありました。だが、顔に黒いあざがあるうえに、足がびっこでした。

竹宗は、一たん決めた許嫁でも会う度ごとに嫌になってきました。竹宗が戦いに出た後八重は、常貞寺や八幡様に武運を祈っていたということです。

ある時、竹宗から届いた手紙に、夜木曾川堤で会うと書いてありました。喜んだ八重は髪を結い提灯（ちようちん）を灯して出かけましたが、竹宗の姿がありません。

知らず知らずのうちに神置き（八幡様）まで来てしまった八重は、八幡様に「どうぞ竹宗さまに会わせてください。」と、一生懸命祈りました。その時いつの間にか覆面の男が後に立っていて八重を切りつけ、殺してしまいました。

いつの頃からか、夜になると常貞寺の前から神置きまでの堤を、人の姿の见えない提灯だけが、行ったり来たりしていたというのですが、提灯の動きとともに草履（ぞうり）の音だけが聞こえていたといいます。

誰いうことなく、竹宗に会えなかった八重の亡霊が、いつまでもこの堤を探しているのだらうと。

この哀れな物語りを知る人も少なくなりましたが、今も昔も恋の道に変わりはありませんでした。

### 芋が瀬の由来

神秘な池として、数多くの伝説を伝える芋が瀬池にまつわるもう一つのお話――

その昔今の愛知県羽黒に福富新蔵という武士が住んでいました。

ある年の月の明るい八月十五日の夜、可愛がっている犬をつれて本宮（ほんぐう）山へ登りました。

山は、しーんと静まりかえっていましたが突然二頭の犬が大声でほえ始めました。新蔵が月のあかりで見ると、山の頂上あたりの岩の間に、何か白いふさふさとしたものが見えます。犬はどうしても前へ進もうとしません。よくたしかめる

と老婆のようで、話しに聞いていた山姥（やまんば）のようです。新蔵は、弓に矢をつがえて、山姥めがけて矢を放ちました。たしかに当たったようです。すると今まで明るかった月夜が俄に闇夜になってしまいました。

それからどれくらいたったのか、黒い雲は流れてもう山頂に山姥の姿は見当たりません。ところが「やまんば」のいたあたり一面に血が流れて、血のあとは山を降り余野里（よのり）の村のある家の門口まで、てんてんとついでいました。

その家から出てきた主人は以前からの知りあいの人で、あいにく妻が二、三日風邪で寝ているということで、不審に思った新蔵が部屋に入って見ると、人の気配はなく、しいてある蒲団の上に血がこぼれており、いつの間にか主人の姿もなく、障子に一首の歌が血で

求めきて 契りの末に

あらわれん 今帰りに行く ふるさとの池  
と書いてありました。

新蔵が裏へ出て見ると、そこからまた血のあとがついて、どんどんたどって行くと遂に美濃国の大きな池まで来てしまいました。

その池を見つめると、血のにじんだ「おがせ」（苧とは麻の古名で、つむぎにしたかせのこと。）が浮いていました。

新蔵は、山姥というだけで射殺したことを悔い傷の養生にと木曾川の魚を取ってきて山姥に与えたといい、食べ残した緋鯉や真鯉がどんどん増えて今のように、たくさんになりいつとはなしに、この池を苧が瀬の池と呼ぶようになったとか。

### 甚兵衛と古狸

各務野を松並木とともに東西に走る中仙道（今の国道二十一号）は、その昔のあるとき化け物が出るという噂が流れていました。

ここに住む甚兵衛は、村人にたのまれて、村の作物を馬にのせて町へ運び、くらしをたてておりました。

ある夏の夕方、日もとっぷり暮れた中仙道を家路に急いでいました。するとどこからともなく、生暖かい風が吹いてきて、突然どこからか「甚兵衛」と呼ぶ大声がしました。あたりを見廻しても誰もいません。

気のせいだろうと、又歩きかけると前よりも大きな声で「こら甚兵衛その荷物を置いて行け」割れ鐘のような声に驚いて、荷を投げると馬を引いて夢中になって走りしました。すると今度は、「馬を置いて行け、置いていかぬとお前を食べるぞ」、甚兵衛は、命にはかえられないので、大切な馬の手綱を放して一生懸命に逃げました。

どこをどう走ったのか、やっとのことで一軒の家が見つかったので、助けを求めましたが返事がありません。でもしかたがないのでしばらくここにかくれようと、天井裏の藁の中にかくれました。するとしばらくして、ものすごい足音がして先程の化け物が入ってきました。

「腹はふくれたし、ひと眠りしよう」と、横になりましたが、蚊がきて射すも

のだからさすがの化け物も「これはとてもかなわない」と、一人言を言いつゝ、土間へ降りると釜のふたを取って中に入り、上からすっぽりふたをかぶって気持ちよさそうに大いびきをかいて眠っていました。

甚兵衛は、にげるなら今だと、はしこを降り始めましたが、大切な馬を食べてしまった化け物は、又どこでどんな悪い事をするかも知れない。これは退治しなければと思うと勇気がわいてきました。甚兵衛は、忍び足で大きな石を幾つもつけて釜のふたの上にのせて、化け物が出られないようにしました。そうして下から墓に火をつけて、どんどん燃やし始めました。

釜の中では、驚いた化け物があばれましたが、どうしても出られません。とうとう化け物は声も出ないようになつたようです。そこで甚兵衛は、そつとふたを取って見ると釜の中には、年を経た大きな古狸が目をむいて死んでいました。その後各務野には化け物が出なくなつて、中仙道を通る旅人も、なんの心配もなく楽しい旅が続けられたと言ふことです。

### 各務野の夜明け

緑ゆたかな、われらの郷土各務原市はその昔、御嶽山に源（みなもと）を発する木曽の清流によつて育（はぐ）くまれ、山あり川あり平野があつて、古くから人の住むにふさわしい、いろいろの条件が、ととのつていました。

人が住めば、おのずからそこに生活の歴史が刻（きざ）まれて、先人たちから語り継がれ、ときとして、それが夢のある伝説となり言い伝えられて、いつの世にも、くらしのなかで生きています。

史書をひもとくと、木曽川が地球上に現れたのがおよそ一千五百万年前と言われていますが、その頃今の各務原台地は、東海湖という湖のなかで、北西は大垣、東は多治見の奥まで、南は三重の津のあたりまでの巨大な湖だったとか。――

木曽谷から岩や砂や木などを木曽川の流れにのせてこの東海湖にまきちらし、永い間に各務原台地の下地をつくりました。



(市役所屋上より市内北部を望む)

こうしてできた各務野はやがて氷河期の終わりに近づき少しずつ草や木が生え始めて、草原や灌木の林らしいものが、でき始めました。

その頃(今から一万七千年くらい前)から人類といえるまでに進化した人々が住みはじめて、石器時代の幕開けとなったようです。

農耕を知らない当時の人々は、野や山や川の獲物を追って、家族の集まりぐらゐの小さな集団が、丘陵や山麓などで生活し始め、いつしか丸木舟をつくり魚を獲るのも生業(なりわい)の一つとなったようです。

こうして各務原台地での人々の生活が始まり、世は移り時代は流れて、その生活のなから伝説が生

まれ、今に語り継がれています。さらに後世へ送り継がなければならないと思います。

昭和五十二年五月から各務野の伝説として二年余、筆者の狭い視野からの拙文を、ご愛読くださいます。ありがとうございます。都合により、ひとまずお休みを戴きます。

立秋とは名のみで、なお残暑の厳しい砌(みぎり)皆様のご自愛を心から祈りながら。――

発行 平成四年四月  
各務原市蘇原寺島町二丁目五四  
小川登

無断転載を禁ず

各務原市図書館蔵書

112063268

112063268



各務原市図書館

8

